

松山櫛便り

第36号

購読
無料

1日・15日発行・櫛に関する情報求ム!
福岡県久留米市田主丸町で活動中!
編集・発行 松山櫛復活委員会
幹事・矢野眞由美

耳納山の片隅で失われてしまった櫛紅葉の景観を復活させることを目的に、櫛の素人がまったりとその様子を伝えていく会報です。

ブログ公開中「松山櫛復活奮闘日記」<http://blog.goo.ne.jp/elster/> 連絡先 e-mail : elster@mail.goo.ne.jp
ホームページ「松山櫛復活委員会」(櫛便りのバックナンバーあり) <http://www.webn-design.com/~mhaze/>



都良香邸で弓を引く道真。北野天神縁起絵巻(承久本)より。

弓の素材としての櫛 その3 都で進化した弓 素材は竹と櫛とニベ

菅原道真は弓の名人?

日本では古来から弓の腕によって才覚が評価されてきました。

貞観12年(870)春、道真(26才)は方略試(官吏登用試験)を受けましたが、出題者である都良香の家で弓遊びをした際、文弱の徒に見える道真が武術の弓射にも「百発百中のいきほひ」を示し、良香を驚かせたという逸話が残っています。

宮中行事で発達した武芸

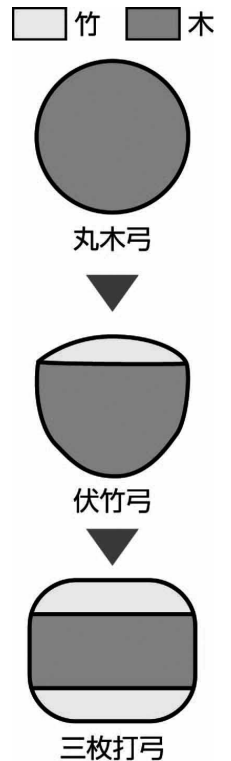
もともと中国では「射は観徳の器」と礼記(らいぎ)射義編でのべ、君子の六芸(りくげい)のひとつに射(しゃ)があるため、この影響をうけ、平安時代には宮廷の年中行事で射礼(じやらい)、賭弓(のりゆみ)、騎射(うまゆみ)等が行われるようになりました。

射礼・賭弓は正月の行事として、宮中の射場で大射(おおま)を射る歩射(かちゆみ)の競技であり、騎射は馬上からの射撃です。この宮中行事の中で強力な弓とそれに対抗した大鎧が出現しました。

職業的な

武芸者による馳弓

騎射の中でも馬を走らせながら弓を引く馳弓(はせゆみ)は、ごく限られた



た者達による長い訓練と習熟が必要な技芸でした。やがてこうした武芸を専門とする武士の集団が確立されていき、馳弓は流鏑馬(やぶさめ)に引き継がれていきます。

伏竹弓とは

平安中期(10世紀)から後期にかけて、伏竹弓(ふせたけゆみ)があらわれます。従来の木弓の外側に竹を貼り付けた弓です。この伏竹弓こそ、日本の弓の歴史における革新的な弓でした。では従来の弓とどこが違うのでしょうか。

丸木弓の場合、弦を外すと樹木ですから真っ直ぐの形を保ちますが、伏竹弓は弦を外しても湾曲しています。この弦を外した状態を裏反りといい、この湾曲を逆に押し弦を掛けるため、同じ寸法で丸木弓よりもずっと威力を増し、飛距離も伸びていくわけです。

木と竹を貼り合わせるために鹿の皮を使った鮠(にべ)を接着剤にし、分離防止と装飾を兼ねて籐を巻きました。

和弓の美

籐の巻き方には数種類ありますが、弓全体に籐を等間隔で巻いた重籐(しげとう)が見た目にも美しく好まれました。

ちなみに丸木弓の時代から弓の握りは、弓の真ん中ではなく下から約三分の一部分。これは木の若い梢側は幹側に比べ、よくたわむためですが、伏竹弓以降、現在でもこの位置は継承されており、弓を張り矢を番えて「会に入った」状態の上下の比率は黄金比に近く、和弓の美しさの所以とも言われています。

合成弓に使われた櫛

伏竹弓はやがて平安後期から源平時代にかけて進化し、もう一枚内側に竹を貼り付けた三枚打弓になります。この頃から弓の素材として櫛が主力として使われるようになってきました。

弓の進化と共に、武士は社会的に大きく進出していきます。

※本会報を許可なく複製・転載すること、または部分的にもコピーすることを禁じます。

参考文献 「弓矢の歴史を語る」 大木賢三、「日本武道辞典」 笹間良彦、「弓馬と名将」 斉藤直芳、「源平合戦の虚像を剥ぐ」 川合康、「謎とき日本合戦史」 鈴木真哉、「全日本弓道連盟教本」 神戸市文書館HP、「源平時代の攻撃用の武具」 近藤好和